新庄城二の丸跡発掘調査説明資料

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター　令和５年８月 19 日（土）

調査要項

遺跡名	新庄城二の丸跡 (遺跡番号 205 － 129)
所在地	山形県新庄市堀端町４番
時代・種別	近世（城館跡）
起因事業	公立保育所整備事業
調査依頼者	新庄市
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査指導	山形県観光文化スポーツ部博物館・文化財活用課
調査協力	新庄ふるさと歴史センター
現地調査	令和５年５月 15 日から 10 月 31 日まで
調査面積	1,800㎡
調査担当者	調査研究専門員　　菅原哲文（現場責任者） 主任主査　　齊藤主税
検出遺構	建物跡　溝跡　土坑　柱穴　ピット
出土遺物	陶磁器　瓦　金属製品　石製品

図１　遺跡位置図（1/25,000）

１　調査の概要

新庄城は、元和８年（1622 年）に新庄藩の初代藩主となった戸沢政盛（とざわまさもり）により築城されました。寛永２年（1625 年）頃に城が完成したと伝えられます。二代藩主の正誠（まさのぶ）は二の丸を拡張・整備しました。新庄は城下町として江戸時代を通じて栄えましたが、戊辰戦争により慶応４年（1868 年）、城や城下は焼失しました。明治時代に廃城となった後、新庄中学校、新庄北高校の敷地となり、高校移転後は公園となりました。

今回の調査は、公立保育所整備事業によるもので、調査面積は 1800㎡になります。調査区は北から１～３区を設定しました（図２・3)。調査区は、二の丸内の米蔵があった場所になります。調査は５月 15 日より開始、重機により盛土を除去し、６月 16 日まで第１面の調査を行いました。第１面は、戊辰戦争時に火災となり、その後に整地が行われた面と考えられます。焼土や炭、米蔵に由来する炭化米が多く含まれる層（Ⅲ層）が調査区内の広範囲に認められました。明治以降の遺構が多く確認されます。このⅢ層上に盛土し（Ⅱ層）学校校舎が建てられました（写真 1)。第１面の調査終了後に重機で第２面まで掘り下げ、現在はこの面の調査を行っています。遺構の掘り下げと写真・記録を行った後、８月下旬以降から第２面下の第３面の調査に着手する予定です。

２　見つかった遺構と遺物

第２面は二の丸に関係する遺構と、戊辰戦争後に瓦などを廃棄した遺構などが認められます。遺構は、焼土遺構（SX84)、溝跡、礎石、柱穴、土坑などがあります（図 3)。上の面からの掘り込みによる明治時代以降の遺構も検出されます。

焼土遺構は、戊辰戦争の際の火災によるもので、覆土に炭化材や炭化米を含みます（写真 2)。焼土や炭化物・炭化米が覆土に含まれる土坑は、戦後に掘り込まれた遺構と思われます。また、瓦が廃棄された土坑（ＳＸ 75・写真 8・9）や廃棄地点（SX200・写真 7）などが３カ所以上確認されました。火災後に不要になった瓦破片をまとめて廃棄したと考えられます。

１区では、建物の礎石や柱穴が検出されました（写真 3)。礎石は大型で方形の割石や円形の石のもの（写真 4)、それより小型の楕円形の石を用いるものがあります（写真 5)。大型の礎石は直径が 50cm 以上で、火災による被熱の痕が残ります（写真 4)。1 区に 4 基確認され、そのうち３基は直線状に配されます。後世の攪乱で失われた礎石もあり建物規模は不明ですが、江戸時代の米蔵の礎石に該当すると考えられます。

遺物は主に江戸時代の瓦や陶磁器、金属製品、石製品が出土しました。少量の中世陶磁器も出土しています。瓦は米蔵の屋根に葺かれていたものと考えられ、黒色の丸瓦と平瓦が主です（写真 10)。軒丸瓦には戸沢家の家紋である「丸に九曜」の紋が施されます。江戸時代の陶磁器は、九州の伊万里焼（写真 12)、唐津焼（写真 11 右）が多く出土しています。中世陶磁器では、中国産の青磁、青花、国産陶器の瀬戸美濃の小皿、珠洲焼の甕の破片が出土しました（写真 11 左・中央)。

写真１　３区第１面遺構検出状況（南から）

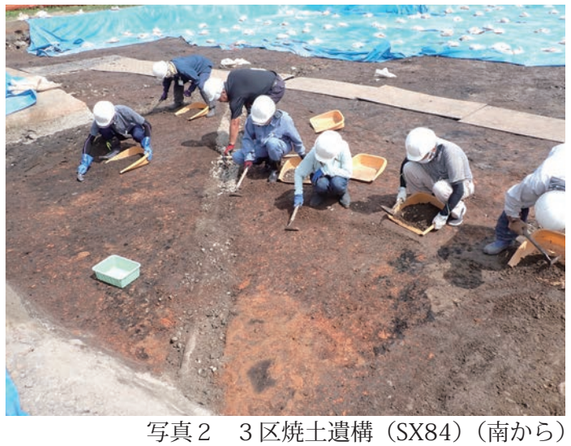

写真２　３区焼土遺構（SX84）（南から）

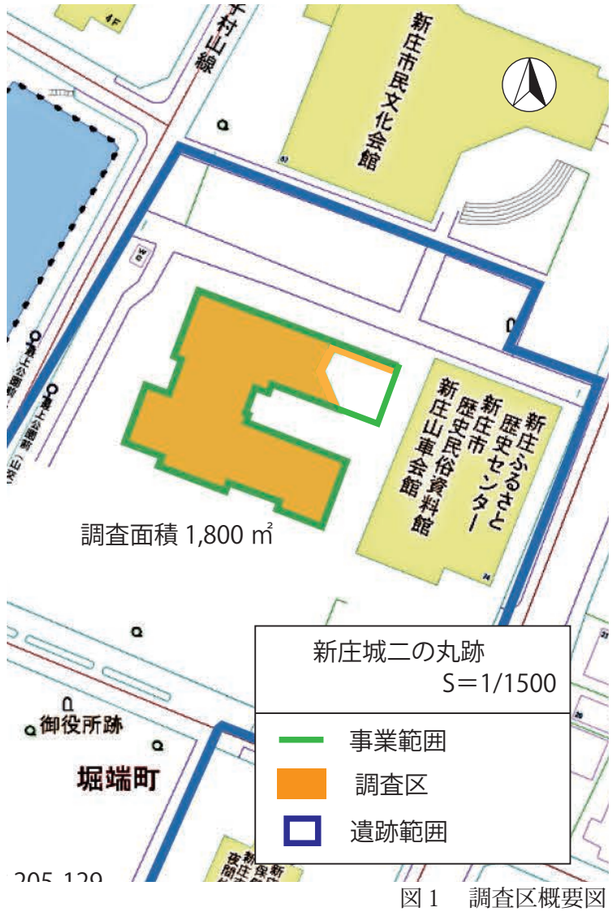

図１　調査区概要図

写真３　１区第２面の遺構検出状況（北から）

写真４　１区礎石（EP204）検出状況（南から）

写真５　１区礎石検出状況（北東から）

写真６　１区の柱穴群検出状況（北から）

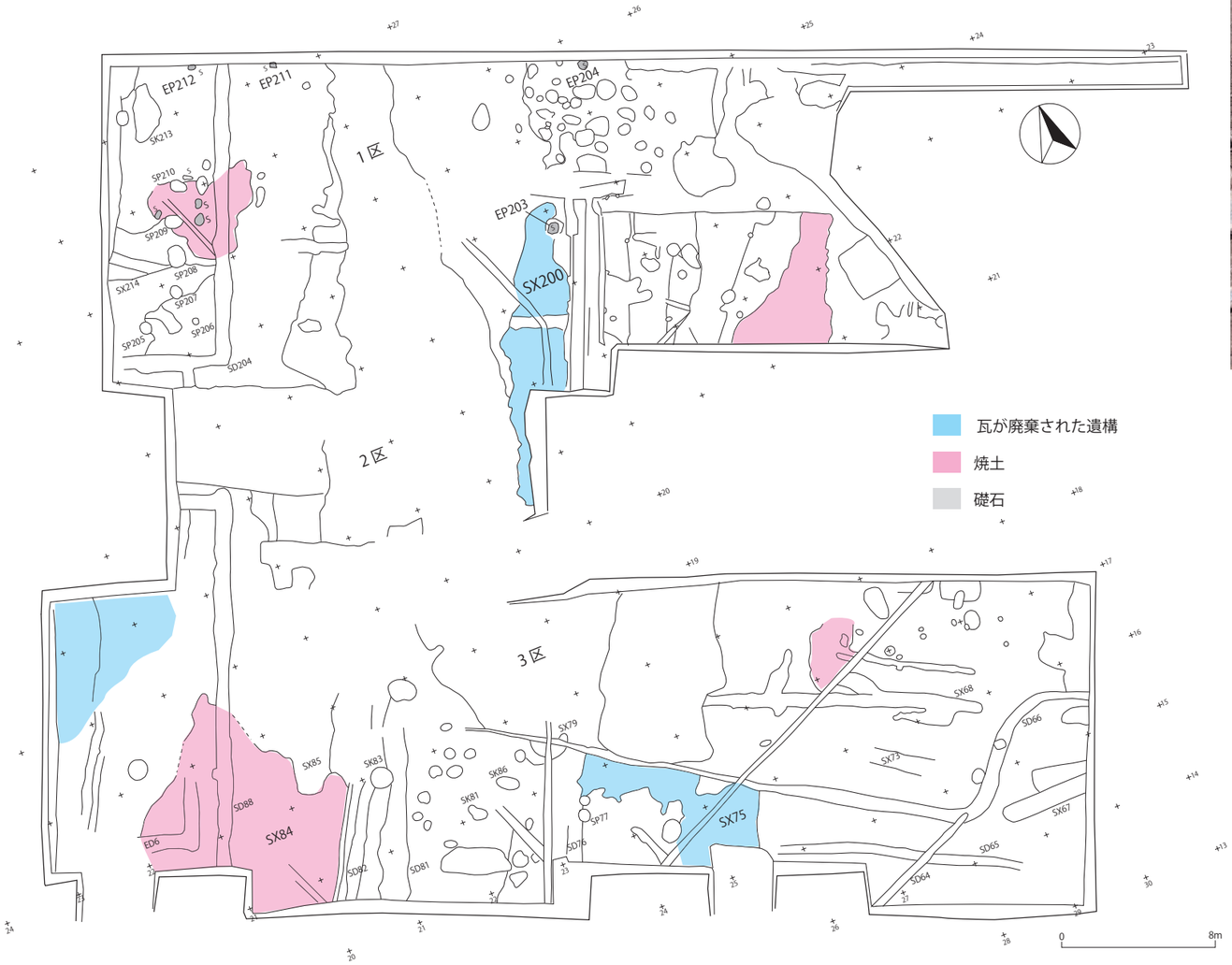

図３　第２面の遺構配置図（S ＝ 1:300）

写真７　１区 SX200 瓦廃棄遺構（南から）

写真８　３区 SX75 瓦廃棄土坑（東から）

写真９　SX75 の瓦出土状況

写真 10　江戸時代の瓦

写真 11 戦国時代から江戸時代の陶磁器
（左から瀬戸美濃・珠洲焼・中国産磁器・唐津焼）

写真 12　江戸時代の伊万里焼

遺物出土